opusdei.org

すべてに時がある

モトリル(グラナダ)出身ホセ・ロペス・レンゴがオプルス・ディンの最初の出会りの出会りの出い出いのおかげで数年後カーに、おりがあるのオプス・ディンが、たる過を話してくれた。

2007/01/13

1950年代

50年代のこと、私はスペインのグラナダ大学法学部三回生で、学業は、

「通ればいい」という感じの中途半端な生き方にどっぷり漬かり、ガールンドを探し歩いてリーグでサッカーリーが、大学でサッカームのでは、私も学年チームのでは、私も学年が、その昔聖ホセーン学生会館、その音をですが、そこの音で推進した。では、そのチームと試合をすることによりました。

アルバイシンチームの人数が足りないので、私のチームからアリカンテ出身のペニャともうひとり、そしました。試合は無得点で進行しましたが、後半の中頃私にコーナーキックをするチャンスが訪れ、ペニャが見事ゴールを揺らした。 1-0の勝利を得ました。

しかし、よろこびは束の間でした。 次の月曜日、三名の効果的な裏切り 行為に腹を立てた本来のチームメートが経営学の授業に参加させてくれなかったので、私は出席数不足で九月に再び授業に出る羽目になりました。

学生会館の寮生がメリエンダ(一種のおやつ)に招いてくれたのを覚えていますが、一緒に聖体訪問をしたこと、みなが親切であったこと、整理整頓の行き届いた部屋、寮生の一人が貸してくれた『人間的な事柄の神的価値』という本のこと以外は、ほんの僅かの記憶しか残っていません。

数年たってから、グラナダの村にあるトーレ・ヌエバという所へ避暑にいったとき、今はオプス・デイのメラリー(使徒的独身のメンバー)である息子の友人が『道』という本を息子に貸してくれました。し、その本を読んだのは、息子ではなく私でした。その書を読んでは

色々と考えさせられたので、『キリストに倣いて』と共に座右の書に加えました。霊的な面は考えず、人間的な面で改善するために有効な道具と考えていました。日常の雑音に縛り付けられていたのです。

引退を間近にして

時が経ち、マドリードに住んでいた 頃、六十歳に近づいて引退を考えて いました。同郷(モトリル)のヌ 人、オプス・デイのスーパーヌメラ リーが、私が事務所を出ると、頻繁 に散歩しようとに誘ってくれまし た。偶然通りかかった教会では必ず 聖体訪問をしようと言っていまし た。

今考えると、あの出会いは偶然ではなかったようです。ある日、オプス・デイのセンターで聖ホセマリアの教えに関するフィルムを見ようと誘ってくれました。こういう具合に時が経ち、その間神について話し

合っていましたが、ある日協力者に ならないかと提案がありました。

承諾しました。多くの気高いイニシアティヴに協力するのは嫌し、強力でしたから。しかとといてしたからをなれているではなからないまだその時は協力以上のでよりはなかったの友人から逃げっている。電話がからになりました。電話がかからになりました。電話がからになりました。でなりました。でなりまし、会わないたのです。

ところが、その友人は諦めませんで した。ある日、一歩進めて私を黙想 会に誘ったのです。私は、はっきり 「ノー」と答えました。

これで話は終わったと思っていたのですが、友人はまた誘ってきました。今回は例外的に受け入れました。黙想会はセゴービャの近くにあるモリノビエホという黙想の家で、

指導はホセ・ミラリェス神父でした。そこでの数日は決定的で、霊的に大きな転機となりました。ゆるしの秘跡を受け、聖体を拝領しました。その時以来、あの頑固な友人のことを私の守護の天使の忠実な盟友であると考えています。

百歳近い友人

私といえば、長旅の終わりに近づき 八十歳を迎えようとする今、体は色 を失い縮んできましたが、愛する者の情熱と若者の熱意を失わず、 日々、「主よ、私はここにおります」と申し上げています。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/subetenishi-gaaru/ (2025/11/21)